と笑顔で語った。

予選通過や優勝の事など考えず、ただ自分の麻雀を打とう。そう思えた事が功を奏したのか、役満親かぶりという逆風に拘らず、予選1回戦は2位に食い込んだ。予選4回での成績は2・1・3・1で97・9ポイント。総合13位で準決勝進出は、1戦目の16000の放出を考えれば、実に立派な数字である。

準決勝は危なげなく自分の麻雀を打ち切っていち早く決勝への椅子を勝ち取った。そして決勝――進出者のうち2名は奇しくも板川の旧知の人物であった。1人は同じ連盟所属プロである滝沢和典、もう1人は関西のプロアマ混合リーグで何度も顔を合わせている関谷祐次。共に何度も麻雀を打った事がある同志のような間柄である。そこにもう1人の進出者、都内で雀荘を経営しているという小泉努が加わり、決勝の火蓋は切って落とされた。

開局早々、滝沢が好配牌を4巡目ですんなり形に仕上げてのリーチ。

4位◎関谷祐次

数巡後あっさりと高目 [5p] をツモ。裏ドラが [3p] で3000、6000となった。板川は親でこそなかったが、この展開に予選1回戦を思い出したという。そしてやはり同じ事を思った。

「気が楽になった」

と。後は追いかけるだけになった。滝沢というトップ者の背中を目指して走るだけだと。抜き去らねばならない者の背中が目の前にある――それは大学までランナーをやっていた板川にすれば、格好の「燃える」シチュエーションなのかもしれない。

東2局、板川の親番は滝沢が軽い仕掛けをツモ和了って流れてしまう。だが板川は負けじと東3局に関谷から満貫を出和了り。流局が続き3本場となった南1局、ドラが暗刻のチャンス手をモノにして跳満ツモ。これで滝沢を抜き去った。その後も裏ドラ2つの5200出和了りなどで、2着3着の小泉と滝沢に20000点の差を付けてオーラスを迎える。ラス親が滝沢である以上、板川が和了り切らねばならない――板川自身も、それは理解していたはずだった。

準優勝◎滝沢和典

しかし南4局、板川は、

[1s][1s][1s][白][白][白][発][発][発][発][発][発][発] ドラ [3p]

の形で出和了りの利かないダマ聴を選択。自身の麻雀のスタイルを「攻撃型」と評するだけに、板川は軽い仕掛けをせず門前で手作りしてのリーチが多い。しかしこの局面で、板川は牌を横に曲げる事ができなかった。

「あの時、余計な事を考えてしまって……」

優勝後、板川は少し恥じらいを伴った表情でそう説明してくれた。この時、ラス親の滝沢との点差は21300点。12000を直撃されれば一発で変わってしまうだけに、手に蓋はしにくい。しかも2着目の小泉との点差が20800点。リーチをかければ倍ツモ条件をむざむざ与えてしまう事になるのだ。

「いつもならノータイムでリーチです」

自分の手にはドラが1枚あるだけ。ひょっとすれば親の滝沢にドラが固まっているかもしれない。或いは2着の小泉に倍満手が入ってしまっているかもしれない。

そういった不安、疑心が、板川の心を抑え込んでいた。

それは陸上競技における、トップ走者の心理にも似ている。集団の先頭を走る人間には、当然、後ろを走る者の姿は見えない。

ひょっとして背後数センチのところに後続が迫っているのではないか、今まさに皆が自分を抜き去ろうとしているのではないか。トップ走者は、そういう不安と戦う事を宿命付けられている。しかし、後ろを振り返る暇などない。ちょうど、麻雀で相手の手を見透かす事ができないように。

一度でもそんな疑念を抱けば、どれだけ必死に足を動かそうともその速度は落

3位◎小泉努